

# 東急・伊豆急着手4年 搾油できる収穫量に

伊豆をオリーブで活性化させようという東急電鉄（本社・東京）と伊豆急ホールディングス（本社・伊東市）の「伊豆オリーブみらいプロジェクト」が始まって4年。今秋、初めて搾油ができる量の収穫が見込めるまでになった。オリーブが伊豆で順調に育つことが実証できたのと同時に、課題も浮かび上がっている。

伊東市鎌田の住宅地のわずかにある約30坪の圃場。2013年11月、一番最初にオリーブを植えた場所だ。大きな木は高さ3メートルを超え、ま

だ少なめだが、実が熟し始めています。伊豆急ホールディングス・オリーブ推進課の若色祐二副課長は「同じ圃場でも成長はまちまちだ

が、条件がよければ2、3年で成長することがわかった」と話す。ここを含め、伊東市と東伊豆町内の5カ所の圃場で

# 伊豆のオリーブ農園 手ごたえ



①順調に育ったオリーブの木。社員はオリーブオイルソムリエなどの資格も取って、育成から加工、販売まで取り組んでいる。伊東市鎌田。②イタリアから苗を取り寄せた国内では少ない品種の実。伊豆急ホールディングス提供

# 農家拡大とブランド化 産地化へ課題

3千本あまりのオリーブを育てている。世話をしているのはオリーブ推進課の社員5人を中心にしたメンバーだ。5人は農作業全般をはじめ、搾油、商品開発の企画までオリーブに専従する。

東急と伊豆急が社員を投入するほど力を入れているのは、オリーブ農園で利益を出そうとしているからではない。伊豆半島にオリーブ産業を定着させるきっかけにするためのパイロット事業。取り組み農家が増え、「産地」に発展することが目標だ。

背景にあるのは、最盛期に比べて半減した観光客や急速に進む人口減だ。主力の鉄道事業をはじめ、関連企業もこのままでは先細りになる恐れがある。地域を活性化させる方法はないか、東急社内に検討組織を設置。浮かび上がったのがオリーブだった。健康志向の高まりなどでオリーブオイルの需要は急増中。天候さえ合えば手入れは比較的簡単で、耕作放棄地もたくさんあることなどに目をつけた。

1本数千円の苗木を無償提供し、収穫した実は全量買い取りという「破格」の条件で、取り組む「共同研究農家」を募集。現在、21軒が2600本を栽培している。専用の搾油所を建設するなど、これまでに投入した資金は数億円になるという。

ただ、もくろみが外れたのは協力する農家が思ったように増えなかったことだ。代わりに直営圃場を増やし、本数を確保した。農家のなかにはうまく成長させられないところもある。地中海原産のオリーブは水はけのよい土地を好み、水田跡にはそのままでは適さない。日照も重要で、畑地でも山間は日照不足に陥るなど、農家に普及させるうえでの課題点もわかってきた。

最大の課題は「もうかることを農家に示すことだ」という。製品のオイルは輸入品と比べるとどうしても割高になる。それでも売れる品質とブランドの確立が欠かせない。搾油はどんな種類の実をどのよう割合合でブレンドするかや工程の管理の仕方できあがりが必要となる。高い技術が必要な作業だといふ。それにも今年、社員が挑戦する。商品開発に向けた第一歩だ。

(石原幸宗)